



日本を明るく元気にする “よい仕事おこし”フェア

in 東京ドーム 2012.11.1



“よい仕事おこし”フェア事務局

◆「日本を明るく元気にする“よい仕事おこし”フェア」の概要	2
◆ 1.開会式の様子	4
●共催者代表挨拶・平野復興大臣からは御来賓挨拶を	4
●小泉元総理などの方々から祝電も	4
◆ 2.各ブース等会場の様子	5
(ビジネス、社会関連、東北支援・特産品、飲食、バイヤーの5エリアに621ブースが出展)	
●多数の商談が成立！ビジネスエリアが“新たな出会い”で賑わいました！	7
●東北復興に特産品・飲食エリア也大盛況！	7
●多数のスタッフが参加	7
●出展者からの声	8
●出展者サポーター（各ブースをサポートした信金職員）からの声	8
●共催信金の担当者からの声	8
◆ 3.各種イベントの様子	9
●フラガールショー	9
●パネルディスカッション「協同組合にできること！～東北復興のために！」	10
肥田 日出生（明治学院大学名誉教授）「協同組合の歴史、そして“全体感”を持つということ」	10
永戸 祐三（日本労働者協同組合・ワーカーズコープ理事長）「自分たちの労働を活かす場を創る」	10
山本 伸司（パルシステム生活協同組合連合会理事長）「食と農が未来を変える。共生の社会へ」	11
五十嵐 康弘（北越後農業協同組合常務理事）「地域農業の復活。協同の力とパートナーシップ」	11
●矢野きよ実ステージ「子どもたちの心の音」	12
●オリンピックメダリスト撮影会	13
●コロケ「ミニライブ」	13
●シンポジウム「自然エネルギーによる安心できる社会へ」	14
小出 裕章（京都大学原子炉実験所助教）VTR出演／加藤 寛（慶応大学名誉教授）メッセージ代読	14
田坂 広志（多摩大学大学院教授、元内閣官房参与）／桜井 勝延（南相馬市長）	15
三上 元（湖西市長）	15
飯田 哲也（環境エネルギー政策研究所）／河合 弘之（弁護士）	16
高橋 洋一（嘉悦大学教授、経済学者、元財務省）／加藤 登紀子（歌手）	16
藤田 和芳（大地を守る会 代表）	17
マエキタミヤコ（ソーシャルクリエイティブエージェンシー[サステナ] 代表）／田中 優（環境活動家）	17
落合 恵子（作家、クレヨンハウス主宰）／鈴木 悌介（鈴廣かまぼこ副社長）	18
池田 香代子（ドイツ文学翻訳家）	18
鎌田 慧（作家）／小林 よしのり（漫画家）／広瀬 隆（作家・元エンジニア）／山本 太郎（タレント）	19
●わんこそば大会	20
●企業PRほか各種イベント	20
◆ あとがき	21

「日本を明るく元気にする“よい仕事おこし”フェア」の概要

■開催日時	平成24年11月1日(木)10:00～18:00(内覧会:平成24年10月31日(水)18:00～21:00)
■会場	東京ドーム
■主旨	日本は、円高・デフレの進行や産業の空洞化、そして「お金がすべて」という考えの蔓延、モラルの崩壊等、政治、経済、社会等のあらゆる面で難題が山積みされ、加えて東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故等、まさに危機的な状況に陥っています。 こうした状況を打破するためには、各企業が、「自分たちの国や社会を良くすることこそ我々に与えられた最大の使命だ」という高い志、理想と勇気を持って立ち上がり、力を合わせて問題を解決することで、日本再生への道を切り拓くよう積極果敢に行動することが必要です。 こうした観点から、取引先企業はもちろんのこと、行政機関や教育機関、社会福祉団体等、同じ理想と志を持った社会の各層の方々を一堂に会し、“つながり”や“絆”を結ぶ機会をご提供して、結びつき、助け合いの中から、国民経済の活力を取り戻すための新たな“よい仕事おこし”を実現し、日本を明るく元気にすることを目的としてフェアを開催しました。
■共催	会津信用金庫、青い森信用金庫、秋田信用金庫、朝日信用金庫、足立成和信用金庫、あぶくま信用金庫、石巻信用金庫、一関信用金庫、羽後信用金庫、青梅信用金庫、大阪信用金庫、大阪市信用金庫、大阪東信用金庫、岡崎信用金庫、亀有信用金庫、川崎信用金庫、北上信用金庫、岐阜信用金庫、京都信用金庫、京都中央信用金庫、気仙沼信用金庫、興産信用金庫、郡山信用金庫、コザ信用金庫、小松川信用金庫、西京信用金庫、さわやか信用金庫、芝信用金庫、城南信用金庫、城北信用金庫、昭和信用金庫、白河信用金庫、新庄信用金庫、須賀川信用金庫、巢鴨信用金庫、西武信用金庫、世田谷信用金庫、摂津水都信用金庫、仙南信用金庫、瀧野川信用金庫、多摩信用金庫、鶴岡信用金庫、東栄信用金庫、東奥信用金庫、東京信用金庫、東京三協信用金庫、東京シティ信用金庫、東京東信用金庫、二本松信用金庫、花巻信用金庫、浜松信用金庫、ひまわり信用金庫、広島信用金庫、福島信用金庫、水沢信用金庫、宮城第一信用金庫、宮古信用金庫、目黒信用金庫、盛岡信用金庫、杜の都信用金庫、山形信用金庫、横浜信用金庫、米沢信用金庫(以上63信用金庫)
■後援	復興庁、経済産業省 関東経済産業局、2012国際協同組合年全国実行委員会、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、宮古市、大槌町、石巻市、気仙沼市、東松島市、いわき市、南相馬市、品川区、目黒区、大田区、世田谷区、杉並区、川崎市、中小企業基盤整備機構 関東本部、東京商工会議所、全国信用金庫協会、東北地区信用金庫協会、東京都信用金庫協会、信金中央金庫
■協力	一神商事株式会社、岩手日報社、株式会社エービーシー商会、株式会社NHKアート、株式会社カタログハウス、河北新報社、グランドプリンスホテル新高輪、株式会社ぐるなび、グローリー株式会社、航空食品株式会社、株式会社JＲ東日本リテールネット、株式会社JTB商事、株式会社シャープドキュメント21ヨシダ、シンプロメンテ株式会社、スパリゾートハワイアンズ、株式会社ダイエースペースクリエイト、大日本印刷株式会社、株式会社高島屋、株式会社高山、株式会社田村米菓、株式会社丹青社、株式会社東急百貨店、東京急行電鉄株式会社、東京新聞、株式会社東京ドーム、株式会社東京ドームホテル、東武鉄道株式会社、株式会社ときわ商会、株式会社ドン・キホーテ、株式会社日旅産業、日刊工業新聞社、日本通運株式会社、株式会社ファミマ・ドット・コム、フードマーケットエコ・ピア、福島民報社、福島民友新聞社、株式会社福島屋、フジサンケイビジネスアイ、富士通フロンテック株式会社、ベニースーパー、株式会社三越伊勢丹、ヤマトホームコンビニエンス株式会社、楽天株式会社、ローレルバンクマシン株式会社

■ 場 内	出展小間621ブース ●ビジネスエリア (422 ブース) ①機械、金属、電子 製造・加工228 ブース②印刷・その他製造73 ブース③IT・情報通信24 ブース ④健康・医療・福祉・環境24 ブース⑤建設・土木31 ブース⑥その他42 ブース ●社会関連エリア (64 ブース) ①行政10 ブース②学校10 ブース③海外9 ブース④社会福祉団体6 ブース⑤その他団体等29 ブース ●東北支援・特産品エリア (80 ブース) ●東北支援・飲食店エリア (9 ブース) ●バイヤーエリア (46 ブース) イベントステージ3カ所 (A・B・わんこそば) 特別展示4カ所 (子どもたちの心の音「書」、東北新聞4社、福島正伸先生の「書」、NHK) 電気自動車体験コーナー、野球力測定コーナー
■ 当日来場者数	19,472 名
■ 商 談 件 数	7,995 件 (事前商談申込件数: 2,004 件)

2012年11月1日(木)に東京ドームで開催された「**日本を明るく元気にする “よい仕事おこし”フェア**」は、多くの共催者、出展者、関係者にご協力いただき、成功のもとに終了することができました。これも一つの組織が前に出るのではなく、皆で周りのことを考えて取組んだことで、たくさんの共感を得て、多くの人の心が一つになったこと。そしてフェアに関係した一人一人が、最後まで全力で取組んでいたのおかげです。ありがとうございました。

左記の概要にあるように、当フェアは、東京都全23金庫、東北地方全27金庫をはじめ63信用金庫の共催、復興庁をはじめ多くの後援と協力のもとに開催。東京ドーム13,000㎡を、ビジネス、社会関連、東北支援・特産品、飲食、バイヤーの5エリアにわけ、621ブースが出展。来場者数は19,472名、事前商談申込件数2,004件、当日の商談はなんと7,995件! 全てにおいてスケールが大きく、そして多くの“新しい出会いを創造する場”となりました!!



1.開会式の様子

●共催者代表挨拶・平野復興大臣からは御来賓挨拶を

9時からの開会式には、平野達男復興大臣、宮川経済産業省関東経済産業局局長や後援いただいている各県市区の首長などの来賓、共催する63信金の理事長、役員、総勢70名が登壇。城南信用金庫の吉原理事長が共催者を代表して挨拶を行った後に、来賓を代表して平野復興大臣、佐藤雄平福島県知事(代読:飯塚東京事務所長)からご挨拶をいただきました。

吉原理事長は、共催者代表挨拶の中で『『日本を明るく元気にする“よい仕事おこし”フェア』は、東日本大震災によって甚大な被害を受けました東北地方の方々に何とか明るく元気にしたい、この日本を良い国にしていこうという共通の理想のもとに、全国63信用金庫の皆様が結集して共同で開催するものです。折りしも、本年2012年は国連が定めました『国際協同組

合年』でございます。信用金庫は地域を守り、地域の方々を幸せにするという公共的使命を帯びた社会貢献の企業です。このフェアがきっかけとなりまして、新しいコミュニティの輪が広がり、地域を越えました人と人、企業と企業との絆が、より深くより強くなることで東北のみなさんが、そして日本全体が明るく元気になるれば』と、フェアの意義を語られました。

平野復興大臣からは、来賓挨拶の中で「企業間のビジネスマッチングは、国の支援に馴染みにくい。フェアは、地域に密着した信用金庫の強みを活かし、国の施策の弱点を補ってくれる」と期待の言葉をいただき、また、佐藤福島県知事の「福島県からも30を超える企業、団体が参加している。福島の元気な姿を知ってもらう絶好の機会だ」という期待を込めたメッセージをいただきました。

●小泉元総理などの方々から祝電も

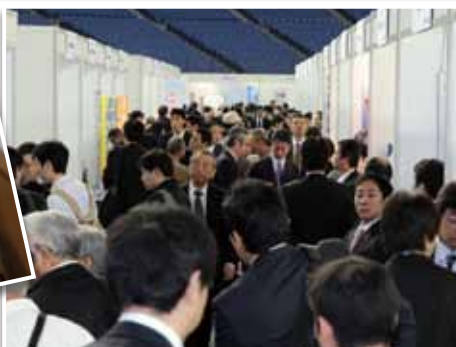
さらに、小泉純一郎元内閣総理大臣の祝電が披露された他、菅直人前内閣総理大臣、坂本龍一様、松田聖子様、美輪明宏様、松平健様、里中満智子様、石塚英彦様、松坂桃李様をはじめ

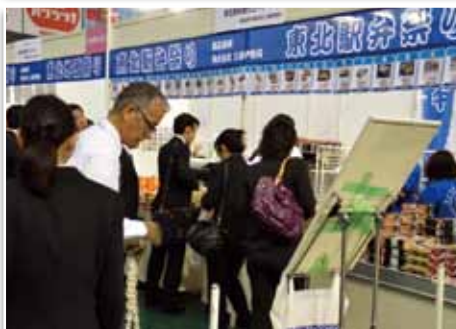
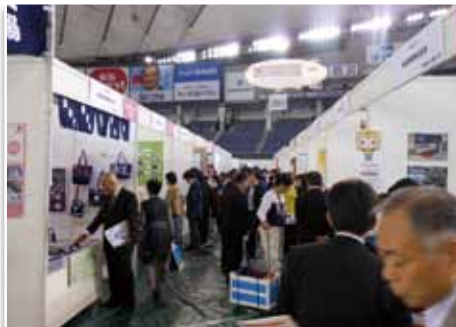
多くの皆様から祝電をいただいていることが紹介され、最後に来賓の方々等15名によりテープカットのセレモニーが行われ、「よい仕事おこし」フェアは、いよいよスタートしました。



2.各ブース等会場の様子

(ビジネス、社会関連、東北支援・特産品、飲食、バイヤーの5エリアに621ブースが出展)



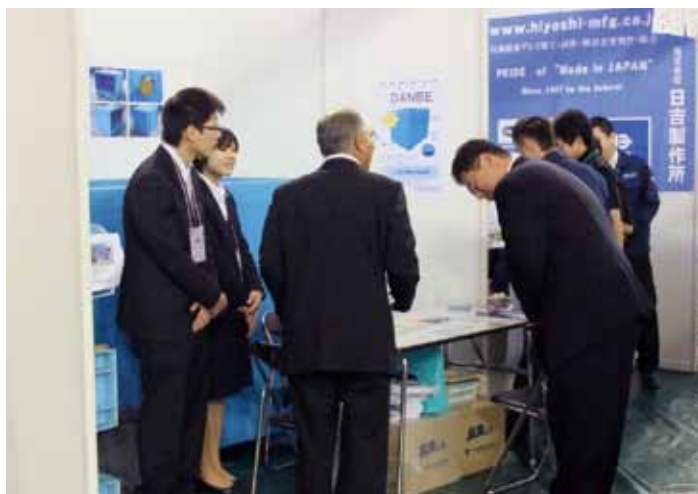


どのエリアもたいへんな賑わい！ また、写真にもあるように、社会関連エリアの「東京新聞」のブースでは、フェアの様子を速報にしたドーム特別版の新聞が3回発行され、来場者に

配布されました。とても素晴らしい記念になったのではないのでしょうか？

●多数の商談が成立！ ビジネスエリアが“新たな出会い”で賑わいました！

当日の商談件数は7,995 件にのぼり、85%の方に商談ができたとおっしゃっていただきました。



●東北復興に特産品・飲食エリアも大盛況！

特に「大間マグロ丼」「福島のうねめ牛丼」、今年B1 グランプリでチャンピオンになった「八戸せんべい汁」などの東北のグルメ

店が並んだ飲食エリアは、昼過ぎに完売店がでるなど大人気でした！



大間まぐろ丼



石巻焼きそば



ふかひれ姿煮丼



米沢牛コロケ



八戸せんべい汁



うに貝焼き



うねめ牛丼



男鹿しよつる焼きそば

このほか、東北の特産品、駅弁、地酒等も大好評でした！

●多数のスタッフが参加

今回のフェアの運営にあたっては、事務局信用金庫のOB・アルバイトスタッフ114 名／出展者サポーター518 名／その他スタッフ256 名、総勢888 名を始め、共催信用金庫の大勢の職員に、様々な担当業務を対応していただきました。特に、出展者サポーターは、出展者から「熱意を持った素晴らしい対応だった」と多くの感謝の言葉をいただきました。みなさん、本当にご苦労さまでした。

そして、ありがとうございました！



●出展者からの声（多数いただいた感想の中から数件をご紹介します。）

◎過去に出展したフェアは、業種がある程度絞られた中で商談会でしたが、今回のフェアはその枠を超えたものであり、当社の製品に興味を持っていただき、近く取引を始めてもらえる会社と出会うことが出来ました。また、異業種のお客様の話も聞くことができ、また東北のご当地商品も味わうことができ、非常に充実した内容であったと思います。

◎日本経済が不透明で先の見えない不安なこの時代、620もの出展者が勢ぞろいしたことは「ものづくり日本」の底力を印象づけるフェアでした。こうした取組みの意義と役割は大変大きいものがあり、開催してくださった信用金庫の皆様には感謝いたします。お互いに勇気を与え、勇気もらう、そんな一日でした。

◎それぞれの出展ブースに担当をつけていただいたのは非常に良い対応だったと思います。弊社の担当をしていただいた方は、フェアが始まるや否や、弊社と業務上関連のありそうな他のブースに積極的に足を運び、弊社の会社案内などを配っていただき非常に心強く思いました。また全く違う業界の会社様も展示していることで、何も

知らなくても多少興味があったブースには恥ずかしがらずに、そして気軽に話を聞くことが出来たので、改めて勉強になることが多々ありました。

◎仲介していただいたビジネスマッチング先6社につきましては、今後の継続商談に結び付く案件が多く出展効果があったと判断しております。ユビキタスという技術用語があります。市場のいたるところにシーズ（技術の種）があると言われますが、故に本展示会を通じユビキタスを痛感しました。最後に、この様な「出会いの場」をセッティングいただいた皆様に感謝と御礼を申し上げます。

◎弊社設立47年目、永きに亘り多くの展示会に参加してまいりましたが、これほど明るく、楽しく、賑やかで、人間味あふれる展示会はありませんでした。私どもの至らぬ展示でしたが、何ヶ月も前からお打ち合わせを頂き、フェア当日は終日、言葉に尽くせないお世話をいただき、只々感謝するばかりです。お礼の言葉を列記すれば千枚あっても足りませんのでこまめと致し、後日ゆっくりとご挨拶させていただきます。皆様のご発展とご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げます。

●出展者サポーター（各ブースをサポートした信金職員）からの声

◎私は東北特産品エリアの担当をさせていただきました。事前に担当する会社について勉強し、商品に対する強いこだわりや熱い想いを感じて、当日は、その想いをご来店いただく全てのお客様にお伝えしようという気持ちで臨みました。フェア序盤はなかなか買っていただくことができませんでしたが、実際に社長様からお伺いした商品に対する想いを来場者にご説明すると徐々に売れ出し、フェア終盤には支店職員総出の協力で多くの方にお買い上げいただくことができました。社長様から「とても感謝しております」というお言葉を頂戴することができ、少しでもお役に立てたことをとても嬉しく思います。今回の経験を活かし、お客様のお役に立てるよう精進して参ります。

◎私が今回担当させていただいたのは、日頃より進呈品や店頭装飾などにご協力いただいている社会福祉団体のブースです。これまでどのような福祉活動をされてきたのか、また障がい者の方たちがどれだけ大変な努力で作品を作られたのか、直接ブース担当者の方から話を聞くことができ、社会における「福祉活動」の重要性や他人への思いやりの大切さをとても強く感じました。ご来場されたお客様も、とても興味を持ってくださり、自分たちにも何か協力できることはないのかなどのご質問があり、とても有意義な時間を持つことができたように感じました。私自身、とても良い経験をさせていただいたと感謝しています。

●共催信金の担当者からの声

◎この度のビジネスフェア、大成功に終わりおめでとうございます。また、出展のお取引先からも「来年も開催してほしい」との声が大半でした。皆様方の情熱が参加したすべての方々に届き、心に沁み入った結果だととても感激して帰ってきました。当日サポートしていただいた職員の方が

本当に一生懸命にお手伝いしている姿を見て、お手伝いしに来ているというよりも「本気なんだなあ」と出展者の社長様も言っていましたが、本当にそのように感じました。とても忘れられない一日になりました。

3.各種イベントの様子

10 時の開場以降、会場内のイベントステージA、ステージB では、様々なイベントが開催されました。

また、わんこそばステージでは、信用金庫対抗戦、一般応募者対抗戦、フェア出展者対抗戦など、11 月11 日に盛岡で行われた「全日本わんこそば選手権」の予選を兼ねた熱戦が繰り広げられました。

ここからは、時間をおって各イベントの様子をお届けします。

イベントスケジュール

	ステージA	ステージB	わんこそば大会
9:00	開会式（挨拶・記念撮影）		
10:00	フラガール	出展企業PR 日之出産業（株）	
11:00	パネルディスカッション 「協同組合にできること！ ～東北復興のために！～」	東京ガラスフィルム事業協同組合／（有）タスクミストレス	信用金庫対抗戦
12:00	矢野きよ実ステージ	もちつき みちのくボンガーズ 東北のご当地キャラ	
13:00	フラガール	出展企業PR 一般社団法人天然住宅	一般応募者対抗戦
14:00	オリンピックメダリスト撮影会 みちのくボンガーズ フラガール	大幸紙工（株） （株）東京歯車工業 邦友建設（株）	一般応募者対抗戦
15:00	コロケ「ミニライブ」		
16:00		もちつき	
17:00	シンポジウム 「自然エネルギーによる安心 できる社会へ」	みちのくボンガーズ 東北のご当地キャラ	フェア出展者対抗戦
18:00			一般応募者対抗戦

フラガールショー



ステージA では、10 時、12 時40 分、14 時10 分と、各20 分3 回にわたりスパリゾートハワイアンズのフラガールが踊りを披露。東北復興支援をメインテーマとした当フェアの開催に対し感謝の気持ちを示したいということで出演していただきました。

そのオープニングでは、復興に向けた決意の物語…彼女たちのメッセージ映像が放映されました。

「福島県いわき市。かつての炭鉱の街が閉山の危機に絶望する中、一山一家の合言葉のもと、日本で最初のテーマパーク常盤ハワイアンセンターが作られ、人を呼ぶために炭鉱の娘たちのフラダンスチームによる全国巡業が行われました。彼女たちの努力もあって、いわきの街は息を吹き返したのです。それは家族と仲間を思う絆のチカラ。

あれから46 年。2011 年3 月11 日、東日本を巨大な地震が襲いました。日本中が悲しみに包まれました。けれど、私たちは負けません。かつて絶望の淵にあったいわきの街を笑顔に溢れる場所に変えた女たち。私たちはその末裔なのです。そして、いま再びこの国を笑顔の絆で一つにするために…」

放映されたその物語に、誰もが胸を熱くし、そしてフラガールの情熱的な踊りに魅了されました。後日、このステージに感動した、たくさんの信金から、スパリゾートハワイアンズに予約が入ったそうです。皆さんもいわき市に足を運んでみてはいかがでしょうか？

（ショーの様子は城南信用金庫のホームページからノーカットでご覧いただけます。どうぞご覧ください。）

パネルディスカッション「協同組合にできること!～東北復興のために!」



ステージA10 時30 分からの1 時間30 分は、「協同組合にできること」というテーマで、協同組合に造詣が深く、またその運動を实践されている方々を招いてパネルディスカッションが行われました。当フェアは国連が定めた「2012 国際協同組合年事業」として認定を受け開催されましたが、協同組合の歴史、意

義、そして協同組合の今後を考える上で、たいへん素晴らしいお話をお伺いすることができました。出演したパネリストのみなさん、本当にありがとうございました。ここではお話のほんの一部になりますが、抜粋してご紹介いたします。

肥田 日出生 (明治学院大学名誉教授) 〈敬称略 以下同様〉 「協同組合の歴史、そして“全体感”を持つということ」

「協同組合の思想はロバート・オーエンに始まり、そして1844 年に、イギリス・マンチェスター郊外のロッチデールに公正先駆者組合が創設されました。これが成功したことで広まっていった。そして、後に体系化された考え方＝ロッチデール原則の中に『一人一票』の原則が謳われています。会社というのは代表的に3 種類あります。『株式会社』『国営会社』『協同会社』です。この3 つの最も大きな違いは『最終決定権がどこにあるか』です。『株式会社』は株式の51%を持っていれば独り占めできます。しかし『協同会社』の場合は出資者『一人一票』の原則があるのでお金のチカラで独り占めで



きないわけです。

ところで聖書では『主よ』という言葉が出てきます。『主』と『奴隷』の違いは何か?ローマの家族制は50 人以上の大所帯で家父長が『主』。『奴隷』もいわゆる強制労働を強いられているイメージではなく、大勢の『奴隷』の中にも財務を任されている者もありました。

では『主』と『奴隷』の決定的な違いは何なのか?『奴隷』には“全体感”を与えていないことです。“全体感”があることで、初めて物事を位置づけて考えることができる。“全体感”がなければ命令を待つしかありません。『株式会社』では一人が独占すると他の人に“全体感”を与えることはありません。命令と服従の関係。しかし『協同会社』で一人一票制の場合、みんなが“全体感”を持たないと成り立たない。『奴隷』じゃなくなる。隷従関係じゃなくなる。これが、協同組合社会にしていく決定的な要因ではないかと思います。」

永戸 祐三 (日本労働者協同組合・ワーカーズコープ理事長) 「自分たちの労働を活かす場を創る」

「労働者協同組合・ワーカーズコープというのは、日本で20 世紀最後に国際協同組合連盟(ICU)に参加した協同組合です。働く者が、失業や不安定就労に悩んでいるのを、国や企業だけに責任をとれというところから、働いている者そのものが、仕事をつくらうというところから始まって、協同出資・協同経営で働く協同組合・ワーカーズコープの運動に到達しましたが、日本にはこの法律がありません。法制化が必要です。もともと強い連帯があった場所、たとえば墨田の町。それが潰されています。もう一度連帯をどうやってつくるか?今、東北でも同

じことが起こっています。町づくりをやる。税金を投入しゼネコンで枠組みを作って...でも、それだけじゃ本当の復興にはならないんじゃないか?自分たちの労働を活かす場所を創る。地域を豊かにする就労を創る。それが仕事おこしの協同組合です。国際協同組合年は、協同組合が連帯したら、地域のため、生活のためにもっと何ができるか考えよ、というテーマを国連から与えられたのだと思っています。



日本は農村を犠牲にして工業国家をつくった。しかし大きな企業はグローバル化だと海外に出ていく。でも、誰も農村には帰ってこない。新しい人も入ってこないという問題。また、都市に

出て雇用された人は幸せなのか？周りには友達もいない。知り合いもいない。大学を出た子たちがリクルートスーツを着て50社も60社も回る社会なんて、人を馬鹿にした社会にすぎない。『労働者』というのは“労働”をする者のはず。なぜそれを“雇

われる”者にしたんですか？これを変えないといけない。地域は市民の責任でつくるもの。その中で協同労働の協同組合は絶対に必要だと考えています。」

山本 伸司 (パルシステム生活協同組合連合会理事長)
「食と農が未来を変える。共生の社会へ」

「私は食と農が未来を変えと思っています。パルシステムの理念は『心豊かな暮らしと共生の社会』... 共生は競争の逆。競争して一人勝ちする、強いものが勝つじゃなくて、どう共に生きるかの問題です。そしてビジョンは『食、農、平和、環境、協同』、特に平和というのは貧困と人権の問題です。単に戦争がないのが平和というのではない。パルシステムの営業エリアは首都圏です。首都圏には富が集中していく。それを全国に還流させていくことが私たちの大きな役割です。



消費者だけでなく、生産者、メーカー、それぞれが独立した上で運営しながら協力し合う組織を作り上げています。

さまざまなボランティアもやっていますが、支援で一番大切なのは、被災地で生産したものを買い続けることです。そして放射能との戦いです。それには生産者自身が測定して細かく積み上げていくこと。お母さんは、自分は食べても、子供たちが食べることにについては認めません。これは理屈ではない。生産者がその立場に自ら立つことが必要です。

今、大きな時代の転換期にあると思います。金銭的価値観、競争的価値観、物の豊かさだけを追求してきた。しかし、それが自殺者を大量に生み、経済を破綻に追い込んだ。それを転換させるのが生命的価値観、生物の多様性です。農業は文化、多様な生き方です。

田んぼや畑は、今までの食の基地であるという概念を超えて、学びの場であり、生きる人間たちをつなげていく場です。私は全国に張り巡らされた農協のネットワークはそういうインフラとして活用すれば良いと思っています。」

五十嵐 康弘 (北越後農業協同組合常務理事)
「地域農業の復活。協同の力とパートナーシップ」

「農協は農家のための協同組合と認識されていると思いますが、農協にはもっと広い理念があり、地域の皆様と協同活動していく中で、食を通して地域住民、日本国民を支えるという大きなテーマを持っています。少し前に農協の全国大会がありましたが、そこで掲げられたのが『協同の力で地域を豊かにする。次代につながる協同をつくろう』でした。今、全国の農家は70代以上が70%、60代以上でみると90%となります。これでは次代につながらない。そして一番の問題が集落の崩壊です。30人いる村民の内、農家は2〜3軒。そして年寄りばかり。農地を守れないだけでなく、地域の生活が守れないのが現状です。地域農業復活が最大の願い。その中で進んでいるのが小さな協同組合です。1軒ではだめでも5軒、10軒とまとまって農業を

する。その中で仕事を分かち合い、機会を分かち合い、最終的に収益も分かち合う、という流れが出てきています。

もう一つ最近変わったことがあります。バブル崩壊以降、大手商社がインシアチブをとり、価格を左右してきた。

でも近年になり、農産物の安全性や商品確保という点で、産地とパートナーになりたいという動きが出てきた。大手卸も産地に出向いて、我々とパートナー契約しています。そうすることによって、生産者の顔、取組みが見える。それを消費者に訴えることができるわけです。

JAグループは信用金庫と同じ協同組合です。組合員ばかりではなく、地域の皆さんのために役立とうという取組んでおりますので、ぜひ近くのJAにも顔を出してみてください。」



パネリストのお話を聞いて、協同組合は素晴らしいと、改めて感じました。そして共通しているのは、**お金だけのつながりではダメなんだということ。社会の“全体性”を回復しなくてはダメだということです。**人と人は顔を合わせて、言葉を交わし、助け合って生きていくのが本来の姿。経済は社会

の一部でしかない。言葉、思い、心のやり取りの中で、本当の意味でのよい仕事が生まれると感じました。(パネルディスカッションの様子は城南信用金庫のホームページからノーカットでご覧いただけます。どうぞご覧ください。)

矢野きよ実ステージ「子どもたちの心の音」



ステージA12時10分からの30分、被災地で「書」の活動で子どもたちの心のケアを行っている矢野きよ実さんのトークステージが行われ、被災地を想う熱いメッセージに多くの聴衆が胸を打たれました。被災地でいっしょに活動している中村耕一さんからは2曲の歌が披露されました。

「被災地の子どもたちは、大人たちがつらい顔をしていたら、自分は決してつらい顔はしない。でも胸の中から出せないものをたくさん抱えている。『書』は習字のように書き方を習うのではなく、心の中にあるものを、そのまま外に出すというものです。」



「みなさん、会場中央のモニュメント、見ていただけましたか？あそこには、『子どもたちの心の叫び』があります。『父』という『書』... それを書いたのを見た時にすごく力強い字だったので『おまえの父ちゃん立派だな』と言ったら『うん、でも父ちゃん津波で流された』って。でも、その子は『父ちゃんは死んじゃったけど、書いたから、ここにいるから、みんなに見て欲しい』と言ってきています。被災地はまだ、何にも変わっていない。復興なんてまだまだです。みんな、どうして欲しいって聞くと、『忘れないで欲しい』って言います。みなさんもどうか、被災地のことを忘れないで、そして私たちにできることをしていきましょう」

矢野さんのトークの中にもあった、会場中央に立つ高さ6mの「子どもたちの書」のモニュメントは、矢野さんの被災地支援グループ「無敵プロジェクト」にご協力いただいて設置したものです。「東北を明るく元気に」をメインテーマにした当フェアの象徴とも言えるものです。

鎮魂... 被災地のことを忘れず、そして、よい仕事をおこし、日本を元気にしていくことが、犠牲者の方々に報いることになるのではないかと思います。

オリンピックメダリスト撮影会



ステージA13 時10 分からの30 分、ロンドンオリンピックの女子レスリング63 kg級金メダリストでオリンピック三連覇の偉業を達成した伊調馨選手と、柔道73 kg級銀メダリストの

中矢力選手の撮影会が行われました。伊調選手は青森県八戸出身であり、お二人とも「東北を応援したい」ということで駆けつけ、フェアに花を添えていただきました。

コロッケ「ミニライブ」



ステージA14 時45 分からの30 分は、ものまねタレントのコロッケさんの「ミニライブ」。コロッケさんは、震災直後から被災地でボランティア活動をされており、今回も当フェアの主

旨に賛同されご出演いただきました。その爆笑のステージには大観衆が押し掛けました。

シンポジウム「自然エネルギーによる安心できる社会へ」



ステージA15 時30 分からの2 時間30 分、学者、市長、弁護士など多数の有識者に登壇いただき、「自然エネルギーによる安心できる社会へ」と題したシンポジウムが開催されま

した。加藤登紀子さんには、メッセージを込めた歌も披露していただきました。司会は野中ともよさん。各登壇者の貴重なお話を、ここでは抜粋してお届けいたします。

◆ 小出 裕章（京都大学原子炉実験所助教）VTR出演 〈敬称略 以下同様〉

「原発の事故は、福島第一原発の敷地内も外も、まったく収束していません。その現実を政府が放置した結果、いまだに多くの人々が苦難を強いられています。こうした現実を目の当たりにしても、政府や経済界には、原発を止めると経済が崩壊してしまう、世界と戦えない、電気代が上がってしまうと言う人がいます。原発の発電コストが一番高いということは、既に有価証券報告書により明らかになっています。原子力発電を一刻も早く止めることが、コストを下げる一番の近道であることは、企業経営者なら当然分かることだと思います。

原発は、仮に事故を起こさなくても核分裂生成物（放射能）を作り出します。残念ながら人間には、その放射能を無毒化する力はありません。その毒物は10 万年、あるいは100 万年、毒性を保有しながら、未来の世代の重荷になっていきます。このゴミが未来の世代にどれだけの金銭的、精神的、肉体的負担を強いるのかということを経営者の皆様にもお考えいただきたいと思います。私は、一刻も早く原子力発電所を廃絶したいと願っています。」

◆ 加藤 寛（慶応大学名誉教授）メッセージ代読

「原発はあまりにも危険であり、コストも高いので、ただちにゼロにすべきです。実は原発がなくても日本経済は大丈夫なのです。火力発電は燃料費がかかり問題があるという方もいますが、為替レートで調整できるので大丈夫です。多少円安になった方が、国内企業にとって輸出競争力が高まり、経済の活性化につながります。

さらに言えば、今後原発を動かしても、経済は活性化しま

せん。火力の新しいもの、風力、太陽光、スマートグリッド、蓄電池などの技術革新が次々と生まれています。中小企業などものづくりの場がどんどん広がります。つまり、原発がない方が雇用が拡大し経済は活性化します。かつての国鉄改革のように電力の自由化を実現し、国民の手には安全な電気を供給して日本経済の活性化を実現しましょう。」

◆ 田坂 広志（多摩大学大学院教授、元内閣官房参与）

「私は、前政権である菅内閣の内閣官房参与として脱原発の政策を強く進言した人間です。私自身は、原子力の世界にいた人間で、1971年から20年間、高レベル放射性廃棄物の最終処分について研究をし、アメリカの国立研究所で、高レベル廃棄物、使用済み燃料の総処分計画であるユッカマウンテンプロジェクトにも参画しました。

現在、原子力を進めるか、進めないか、原発ゼロ社会を目指すか、目指さないかという議論がされていますが、実はこの問題は選択の問題ではなくなっています。高レベル放射性廃棄物の地層処分が出来なければ、原子力は必ず止まります。9月11日、日本でも最高権威の学術会議が、内閣府原子力委員会に『日本における今後10万年の地層の安全性を確保できない』という正式な報告書を提出しました。地層処分を日本で実施することは適切ではないということで、数十

年、数百年間使用済み燃料はそのまま保管しなければならないわけで、発生する廃棄物の上限を決めておく総量規制を実施しなければならなくなります。そして、総量規制が実施されると、遅かれ早かれ原発は止まります。これは推進、反対関係ありません。原発ゼロというのは政策的な問題ではなく、“不可避の現実”であるということです。

今、経済界の方、政府の方、霞が関の方が原発を推進しようしていますが、この問題にしっかりとした解決策を示すことなく、ただコストが上がるからといった理由で進めようとすることは、国民に対して無責任です。この事実を認識したうえで、原発の議論をすべきであると私は考えます。」



◆ 桜井 勝延（南相馬市長）

「原発は人の心を破壊しました。津波で636人が亡くなり、原発事故で避難を余儀なくされて、350人もの方が亡くなっています。家族がばらばらにされ、住む権利を奪われ、今も希望を失う現実の中に押しこめられている人たちが、3万人以上もいるという現実。自分の未来を奪われた人たちが、どのように暮らしていけばいいのか。皆さんの家族が一瞬に



して命をなくされたとき、皆さんがどのようにして立ち直れるでしょうか。ましてや仕事がない、暮らすところがない、さらには、住む場所も食べ物も作れない現実にいる自分たちの将来を奪われた人たちに、

国がどのような責任をとるのか、東京電力はどのような責任をとるのか、原発は止めなければ駄目です。

人は、決定をすれば動きます。自分の心を変えれば動きます。社会を変えることは出来ます。どうか皆さん、自分の人生は自分で切り拓くしかありません。新しい社会は必ず作れます。将来、そして子供たちに負担を残してはいけません。若い世代が戻れないような社会を作ってはなりません。どうか皆さん、この現実を福島だけの問題ではなく、日本全体の問題であるということをしっかりと、それぞれが認識して、新しい社会を作ろうではありませんか。」

◆ 三上 元（湖西市長）

「昨年4月21日の静岡県の市長会議で、浜岡原発を止めてくれと発言しましたが、20数人いる市長は誰も賛成してくれませんでした。ところが、そのことを全国紙が報道してくれました。その後の5月6日に、当時の菅直人首相が中部電力に浜岡原発を停止するよう異例の要請を行いました。

高レベル放射性廃棄物をモンゴルで地層処分をしようと交渉していましたが、もしも、私がモンゴルの大統領だったら引き受けようと思います。なぜかと言いますと、モンゴルは10万年地震がないからです。1年間100億円で引き受けると、それが10万円で1,000兆円になります。

これを50基の原発で割ると、保管コストは1基あたり20

兆円です。電力を作るまでは安いかもしれませんが、その保管コストは天文学的コストがかかります。

原発には危険性があるのは分かっているが、安いから作り、稼働させるという賭けをしてきたのが経済界です。賭けに負けたのに、東海村の原発を稼働させますか。東海原発の30キロ圏内には90万人の住民がいて、浜岡原発も30キロ圏内に70万人の住民がいます。原発のコストと危険性をお分かりいただければ幸いです。」



◆ 飯田 哲也（環境エネルギー政策研究所）

「自然エネルギー社会を作るときが来ています。今、世界では第4の革命ともいうべき爆発的な自然エネルギーの普及期にあります。これには大きく分けて3つの意味があります。

1つ目は、**風力、太陽光など、量的に倍々ゲームで自然エネルギーが増えているということです。**世界全体の風力発電が昨年1年間で、4,300万キロワット、設備容量で原発43基分増えて、合計で2億3,000万キロワットになっています。原子力は現在、3億7,000万キロワットですから、**あと3年で風力発電は原発を追い越すと見られています。**

2つ目は、**自然エネルギーへの投資が毎年20%伸びていて、昨年、世界全体で20兆円の投資が行われました。これが10年後には200兆円になると言われており、自然エネルギー分野は産業経済の中心になりつつあります。**これから

の経済的革命においても自然エネルギー分野は期待できます。

3つ目は、**小規模分散型の、地域分散型革命です。**今から30年前のデンマークは、10個くらいの大規模な火力発電所で独占的に電力を供給していましたが、現在では、小規模分散型の風力、高ジェネレーションで全てを賄っています。一番違うのは、全ての供給源を地域の人々が持っているということです。これまで、電気代を支払っていた地域の人々が自分たちで電気を作り、供給することで新しいお金の流れが出来ています。

原子力はもう終わっている昔のエネルギーです。私たち自身の新しい社会を作っていく時代が来ています。地域から変えていくことが、新しい未来を作っていくことになると思います。」



◆ 河合 弘之（弁護士）

「日本中の原発を止める方法は大きく分けると2つあります。

一つは、**今止まっている原発を再稼働させないことです。**大飯の3、4号機も定期検査に入りますので、再稼働させなければいいんです。私たちは、現在日本全国の原発の差し止め訴訟を行っていますので、それで止める。それから、デモで止めるなど、皆の力で再稼働をさせないようにする。こうした状況が、1年半続いています。これを3年、5年、7年と続けてい



くと、原発推進派の空気が抜けていきます。なんだ、原発止めても大丈夫じゃないかってことになります。

もう一つは**脱原発法を作るという立法の力で止める方法です。**残念ながら現在は、原子力基本法の第1条に、原発を国策として推進すると書いてあります。この法律を変えることによって、国策を脱原発の方向に変えていく方法です。

私たちはこの2つの方法を同時に追求しなければなりません。私は脱原発基本法の制定に力を注いでいます。高まる国民の声を法律という形で固定化していきたいと考えています。」

◆ 高橋 洋一（嘉悦大学教授、経済学者、元財務省）

「経済界の人たちが、原発はコストが低いと言ってきたのはなぜかと申しますと、簡単な話で、本当は負担すべきものを負担していないそれだけなのです。**今回のような事故が発生するのに、事故は発生しないと仮定してコストを想定したり、電力会社が負担すべきお金を税金で賄ってコストを少なく見せかけています。多額の税金が投入されているのにコストに組み込まれていないのです。**

今の日本の原発が加入している保険



は、自動車の自賠責で言うと1,000円くらいしか保険金が出ないようなものです。今回の事故の補償のように本当に必要な金額が支払われる保険に入るには、莫大な保険料がかかります。こうした隠れたコストを表に出せば、いかに原発が高いかおわかりいただけるかと思います。コスト論でいけば、**原発は絶対に止めるべきです。なぜ、コストが上がる、値上げすると平気で言えるのか、それは地域独占企業だからです。既得権を持っている人々が大勢いますが、地域独占を解消することが重要だと思います。」**

◆ 加藤 登紀子（歌手）

「震災、原発事故などにより、いろいろな事情を抱え持った子供たちが大勢います。そんな子供たちに、これからが皆の出発点で、色々なことを学び、これまでの苦難を力に変えて生

きて行って欲しいなと思います。今までの悲しい歴史を自分の踏み石に出来たか、そこを社会が踏み石に出来たか。そ



れがその国のその後の歴史に関わってくると思います。そうしたことに若者たちが手を繋ぎながら、立ち向かっていくことを

希望しています。」

◆ 藤田 和芳 (大地を守る会 代表)

「私は、食べ物は安全なものでなければならぬと思ってきました。だから農薬や化学肥料も使わない農業をしようという運動を30 数年間行ってきました。そんな中、昨年3月11日に震災が発生し、福島第一原発から大量の放射性物質が飛散しました。今でも福島の生産者の野菜は売れません。肉も魚も売れません。全て放射能の問題からです。福島の生産者の中には、もう農業が出来ないという方も出てきました。宮城県も岩手県の生産者も同じ状況の方が大勢います。東北は原発事故が起こるまで、日本の食料の最大の基地でしたが、大きく傷つきました。



た。日本の食料自給率も現在の39%から下がっていくかもしれません。福島原発の事故の影響はあまりにも大きすぎたと思います。

命を守り、命を育む農業、有機農業と生態系に大きな傷をつけ、未来の子供たちに大きな不安を与える原発は共存出来ません。原発をなくすためなら、少しくらいの節電なら喜んで協力します。原発を止めると不況になると言う人もいますが、私たちは少々景気が悪くなっても歯を食いしばって生きていきます。有機農業という食べ物の世界は、まさに人と人が助け合うことを作り上げてきた運動です。一日も早く原発をなくし、お互いが助け合える未来を築きあげましょう。」

◆ マエキタミヤコ (ソーシャルクリエイティブエージェンシー[サステナ] 代表)

「私は野菜もお米もお金も大事だと思いますが、情報も人間が生きていく上で不可欠だと思います。脱原発に賛成の人が7割、8割にいるのに、脱原発にならずにむしろ逆行している感じさえあります。マスコミって何だろうって思います。私の今日のテーマは『自治に必須の情報分配システム』です。私は、最近の原発に関する報道や合意プロセスは変だなと感じているからです。正しい情報を伝えてくれないマスコミをマスコミと呼ぶのをやめましょう。あれは第一マスコミとでもして

おきましょう。そして正しい情報を伝えてくれる市民メディアとも言うべき、第二マスコミというものがあります。今日のフェアの中継をしてくれているアワープラネットTVやブースを出されている東京新聞さんなどがそれにあたります。第一マスコミしか知らない人に第二マスコミについて教えてあげてください。」



◆ 田中 優 (環境活動家)

「これまで言われてきた脱原発か、原発はそのままか。一方の側には原発という未来がありますが、一方は原発がないというだけで何のモデルも示されていません。私は、その描かれていない未来が実は重要だと思っています。

東京電力は利益の91%を一般家庭から得ています。電気料金は、換算すると1キロワットアワーあたり26円を超えましたが、太陽光発電は19円なので、どちらが安いか一目瞭然です。私たちは、送電線に頼らないオフグリッド社会の目前まで来ました。

物によっては、既に実現できるものもあります。日産のリーフという車がありますが、これはリッター60キロも走る電気自動車です。日産はさらにリーフ トゥ ホームというものを開発しました。これは家庭で太陽光発電を設置すると家庭で余った電気をリーフ(車)に充電出来、逆にリーフで余っ

た電気を家庭で利用出来るというものです。これからの私たちはこう考えます。電気料金+ガソリン代+自動車購入代の総額と、太陽光発電設置代+電気自動車購入代+つなぐコストの総額のどちらが安いということです。これからの時代はオフグリッドの時代です。

東京電力が電気料金を2倍にする、どうぞしてください。高くなったら安いところを作ればいいのです。ですから、私たちは脱原発だけでなく、そこから先の新しい未来を作ってしまうといいのです。2008年ですが、日本は石油、ガス、石炭などを買うのに24.5兆円ものお金を海外に払いました。1都道府県で割ると5,200億円にもなります。このお金を国内で回して、エネルギー開発に使い、自給すればいいと思います。



日本にはもう一つ、大きなエネルギーが眠っています。それはバイオマスです。木材を使ってそれを燃料にしていってらうなるか。実は、ランニングコストが灯油よりも安く、世界一効率の良いペレットストーブを作った会社があります。新しい技術は雇用も創造出来て、事実、その会社は製造を福祉作業所の人たちに依頼しています。福祉作業所が通常行っ

ている簡単な作業ですと月額数千円しか給料が出ませんが、そのストーブを作ってくれている作業員の方には月額7万円の給料をお渡ししているそうです。何かに反対するだけではなく、新しい未来を作っていくことも必要です。私はそれをオフグリッド運動として実現したいと思っています。」

◆ 落合 恵子 (作家、クレヨンハウス主宰)

「私は昨年の3月11日以降、色々なことを変えなければいけないと思っています。

1つ目は、『より多く、より大きく、より早く』を価値観にして、動いてきたこの国の価値観そのものを変えなければいけないということです。

2つ目は、一部の人々の利益のために、多くの人が犠牲になっていく『犠牲のシステム』そのものを変えなければ何も変わらないということです。

3つ目は、原発をテーマにしつつ、この国の原発的体質そのものを変えていかなければならないということです。

この国の政治は、私たちが、さよなら原発集会や毎週金曜

日の首相官邸でのデモなどで声を上げてきても、何一つ聞こうとしない人たちが動かしています。これが本当の民主主義なのかと思い、失望と落胆の気持ちで一杯です。私たちが、希望に向けて初めの一步を踏み出すためには自らを含めて価値観を変えていかなければならないし、政治家もチェックしていかなければならないと思います。今、私たちに必要なことは鎮魂と抗いです。どちらか一つではありません。あれだけの犠牲者が出たことに対する鎮魂と同時に、抗いを持っていかなければ、このまま私たちの思いは潰されてしまうと思います。」



◆ 鈴木 悌介 (鈴廣かまぼこ副社長)



「この3月に『エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議』という団体を立ち上げました。現在、地域で頑張っている中小企業450社が集まっています。単純な反原発、脱原発をやろうとしているわけではありません。経済界に

いる人間がやるべきこととして、地域で再生可能エネルギーを中心とした、エネルギー自給の仕組みを小さくてもいいから作っていかうという活動を行っています。小さいからこそ始められることもあります。中小企業の経営者として、自分の会社の工場の屋根にパネルを付けて使用電力の20%くらいを自分で作ってみるとか、あるいは地域の仲間を集めて、会社を作って小田原電力みたいな会社をやってみようとか、そんな小さな循環をつなげていきたいと考えています。

もう一つ大切なことがあります。私どもの会社は、食品を扱っていますので、冷蔵庫をたくさん使っています。10年前のものに比べて、半分くらいの電気で動きます。こうした設備を思い切って、切り換えていけば、日本全体の電力消費量は大幅に減少していきます。同時に、省エネビジネスの技術革新も高まっています。そうすると、原発が必要か否かの議論は、必要なくなります。後は、化石燃料の比率を減らして、地域が自立して再生可能エネルギーの活用を増やしていけばいいのです。地域でのエネルギー自給活動は、地域活性化にもつながります。お金が回り、地域に人が集まってきます。私ども『エネ経会議』では、年会費1万円で新規会員を募集中です。是非、仲間になっていただき地域で、エネルギーについて一緒に考えていきましょう。」

◆ 池田 香代子 (ドイツ文学翻訳家)

「11年前に『世界がもし100人の村だったら』という本を出して、5冊目まで出していますが、実はその5冊目がエネルギーに重点を置いたもので、その一部を紹介したいと思います。

『アイスランドの人は99%の電気を水力と地熱で賄ってい

ます。ドイツの人は14%の電気を、デンマークの人は20%の電気を太陽や水や風などから作っています。日本の人が太陽や風で作っている電気は0.7%です。』



今は、日本は0.9%くらいになっています。これは明るい話です。なぜかと言うと、私たちには出来ることがまだたくさんあるからです。アイスランドはEUに入っていない。国をあげて金融のギャンブルみたいなことをやって、リーマンショックを迎えた結果、通貨の価値が半分になってしまったそうです。輸入品の値段が2倍になってしまったわけですが、不幸中の

幸いで、発電のための重油は1滴も買う必要がなかったのです。アイスランドの地熱発電のプラントには、日本企業が進出しています。日本は、地熱の資源量世界3位で、プラントの経験も技術もあるのに、なぜか地熱発電が盛んではありません。地熱発電は原発と同じく、24時間発電出来ます。今こそ、その考え方に舵を取るべきであると思います。」

◆ 鎌田 慧 (作家)

「原発に反対してきた人は、3.11が起きて、大きな反省をしたと思います。力を尽くして戦ってこなかった結果だと思えます。大きなものに依存すればいいという思想を転換できなかったことが、失敗の大きな原因だと思います。つまり、電力会社の独占状態を許してきたということです。私たちに今出来ることは、依存していればそのおぼれで生活できるという発想を転換して、自分たちで出来ることはやっていくということです。」

今、国民の8割が原発に反対しているにも関わらず、政府

が方針決定しないのは、個人の欲望や思い込みがあってその妨げになっているのであって、その一つ一つを取り除いていく必要があります。私たちは1,000万人署名の活動をしていて、現在810万人分集まっていて、残り190万人分です。一人ひとりの思いに訴えていくことが必要だと思います。私たちは3.11以前にやらなかった、やるべきだった活動を行い、1年半が経過しています。みんなで原発の再稼働を認めず、廃炉に持っていきましょう。」



◆ 小林 よしのり (漫画家)

「私は3.11以前、原発が危険なものであるとはまったく思っていませんでした。原発が水素爆発を起こした時も、まさかメルtdownしているとは夢にも思いませんでした。その後のテレビの報道でも、まだまだ騙されていました。それ以降、全てが嘘だったということがわかり、原発について勉強しました。4号機のプー



ルの問題、高レベル放射性廃棄物の処理問題など、全てが行き詰っていることがわかりました。その結果、脱原発をすれば、倫理的にかなう上に、なおかつ経済成長も見込めるというように理で考えて主張できるところまで来ました。現在、保守論壇の方々から裏切り者と言われていますが、『脱原発』で邁進していく考えです。それが明日の日本のため、子供たちのためになると確信しております。」

◆ 広瀬 隆 (作家・元エンジニア)

「私は、吉原さんと山本太郎さんに心から感謝するとともに尊敬しています。3.11以前は原発を危険だと思っていたなかったお二人が、現在は先頭に立ってリードしてくださっているからです。私は希望を持っています。原発は絶対に止めます。」



◆ 山本 太郎 (タレント)

「原発が嫌だということキレイに仕事がなくなりました。」

それはそうで、原子力は電力会社だけのものではないからです。電力会社10社だけで、1,000億円のお金をマスコミに払っています。その他に、電機メーカー、建設会社、銀行、保険



会社などが絡めば、身動きがとれないわけです。でも私は、自分の仕事のことでなんてどうでもいいのです。今、行動しないと終わってしまうのです。日本は地震大国で、原発なしでもエネルギーも足りています。2020年とか25年とか、寝言を言っている場合ではなく、即廃炉にすべきだと思います。私たちは生き延びなければならないからです。」

(シンポジウムの様子は城南信用金庫のホームページからノーカットでご覧いただけます。どうぞご覧ください。)

わんこそば大会



特設の「わんこそばステージ」では、11月11日に盛岡で開催された「全日本わんこそば選手権」の東京予選として信用金庫対抗戦、一般応募者対抗戦2試合、フェア出展社対抗戦の計4試合が実施され、大盛りりの激戦の末、全国大会には一般応募

者対抗戦を勝ち抜いた「まじめにとことん」チーム（東栄信用金庫取引先）の出場が決定いたしました。みなさん、真剣なファイトおつかれ様でした！

【各対抗戦の優勝チーム】

- 信用金庫対抗戦 「城北信用金庫」チーム
- 一般応募者対抗戦 「少年写真新聞社」チーム（城南信用金庫取引先）
「まじめにとことん」チーム（東栄信用金庫取引先）
- フェア出展社対抗戦 「TEAM SHIRANE」（城南信用金庫取引先）

企業PRほか各種イベント



イベントステージBでは、6社（日之出産業株式会社、東京ガラスフィルム事業協同組合、一般社団法人天然住宅、大幸紙工株式会社、株式会社東京歯車工業、邦友建設株式会社）による「企業RR」が行われた他、北越後農業協同組合による「餅つき」、「東北ご当地キャラショー」（決め手くん、ホヤぼーや、そばっち、むすびまる、いしびょんず、スギッチ、キビタンの7つのご当地キャラクターに加え、信用金庫のイメージキャラクター信ちゃんが出演）が開催されました。また、イベントステージA・

Bともに、福島を中心として活動するお笑い集団「みちのくボンガーズ」がMCやライブで観衆を沸かせました。みなさん、ご協力ありがとうございました。

会場内では、イベントステージ以外にも、「電気自動車の試乗」や「野球力測定」、ブルペンなどを案内する「バックヤードツアー」、また、東北の新聞4社の震災を伝える紙面、福島正伸先生の夢を実現する「語録」の展示など、様々な企画が実施され、来場者を楽しませてくれました。



【あともぎ】

みなさん、“よい仕事おこし”フェア、本当にご苦労様でした。繰り返になりますが、このフェアの成功は、自分のためではなく、人のため、地域のため、そして、東北のためを考えて、全力で取組んだみなさんの努力の結果に他なりません。これから、お取引先、地域の方、関係する全ての方々と“夢”と“感動”を分かち合えるよう取組んでいきましょう！

